

『有 終』 第2輯 一順正女学校一

刊行のことば

有終資料篇第二輯をここに刊行する。第一輯の「山田方谷と有終館」に次いで、今回は本校所蔵の資料の中から、順正女学校に関わるものを選んで紹介する。今年に順正女学校の創立から数えて百十年目に当たり記念すべき上梓となった。

それにしても、こうした種類の出版は、学校単独では成しがたい。同窓生の深い御理解と御支援なしにはかなわぬことである。第一輯に対しては、幸にも、多くの方々から力強い励ましのおことばをお寄せいただいた。この事業の完成を願う私どもにとっては、何よりのお力添えであり、無上の喜びである。心から感謝申し上げたい。

今回も、山陽印刷株式会社をはじめ各方面から多大の御協力をいただいた。はばかり多いことであるが、この有終資料篇の前途の幸運を祈ると共に、改めて読者の皆様の御高庇と御叱撻とを謹んでお願いする。

平成三年四月

岡山県立高梁高等学校長 戸 村 彰 孝



福西志計子（1847～1898）

順正女学校の創設者。松山藩士福西伊織の一人娘として生まれる。名は繁、後年志計とも志計子とも呼んだ。7歳で父と死別したが、母の意向で隣家の山田方谷に漢学を学ぶ。慶応2年（1866）17歳の時、井上助五郎を養子として迎え、結婚生活に入った。

明治8年（1875）29歳の時、木村静と共に岡山の岡山裁縫伝習所に就学した。翌9年業を終え、10月木村と共に高梁小学校に新設された女紅場（翌10年より裁縫所と称される）の教師になった。明治12～13年に金森通倫、新島襄らのキリスト教伝道に接し、木村と共にキリスト教婦人会を結成した。しかし、このような活動が教師として不適格と批判され、14年辞職した。

14年12月10日、木村と共に順正女学校を高梁向町の黒野氏宅を借りて開設した。中四国で最初の女学校であった。教育内容は当初裁縫を主とした。15年、金森通倫により洗礼を受け、高梁基督教会の創設にも加わった。翌年迫害の中で大学を創設したマリー・ライオンの伝記に感銘し、青年女子の教育を天職と自覚した。18年1月7日、文学科を併置し女学校としての基礎を固めた。初代校長は柴原宗助で、彼女自身は生涯経営者・教師であった。非常に厳格で人を畏服せしめ、男性的な性格であったといわれる。

29年肺結核に倒れ、以後療養生活に入る。当時の校長伊吹岩五郎は、臨終までの3ヶ月間、聖書を枕辺に読み、共に祈祷したが、彼女が特に愛読したのはコリント書で、特にコリント後書12章第9節の「我恵汝に足れり」の句に、病気の焦燥から豁然として安んじたという。享年52歳。



校 旗

校旗の制定は明治14年の開校以来久しく待ち望まれていたが、大正5年度の本科・実科の卒業生の寄付により、卒業記念としてついに実現することとなった。出来上がった校旗は京都にて調製されたもので、そのデザインは「地質は塩瀬にして此を二枚合わせとし色は紫百合の花を白に抜き縁に白き総を施し」（「園の音信」18号）たものとなっている。この校旗は、大正6年12月10日、満37年の創立記念日に、順正女学校のシンボルとして初めて講堂に掲げられ、ここに開校以来の積年の希望が達せられたのである。

